



HEART to HEART

Q&A

9～11月こうのとり外来の成績

編集後記

---

## HEART to HEART

### 『 決断の時 』

〈Kさん〉

子どもを“生む”ことはできなかったけれど“育てる”ことはできるようになった。子どもを生めなかった事には後悔も未練もない。「この子がなにより大事」と思えるから。



私は30代半ばから40までの数年間、諏訪マタニティクリニックでお世話になった。体外受精の回数は、初めのうちこそ把握していたが、そのうち数えるのをやめたので詳しくはわからないが、相当数に上るはずだ。皆さん同じだと思うが、当初は毎回の治療のたびに大きく一喜一憂し、期待に反してダメだとわかった時のダメージは耐え難く、帰りは必ず車の中で大声で泣いた。今でもよく覚えているのは、何回目かのトライのこと。今日は受精卵をお腹に戻す日だからと仕事を休んで、朝の状態を電話で確認した際、「受精はしているが、戻せる状態では無いので、来院しなくても」という説明を受けたことがあった。電話だけではすぐには納得できず、とにかく病院に行きますと答えて行った。見せていただいたその受精卵の写真は、素人の私が見ても悪い状態だとわかる、とても着床に至ると思えないようなもので、だから、遠方から通う私への配慮だったのだとすぐにわかったのだけれど、それにしても何度も何度も頑張っているのにこんな結果しか出せない自分自身があまりに情けなく、私は初めて診察室で泣いてしまった。いつもなるべく冷静に思っているのに、その時はどうにも堪えられず泣きじゃくってしまい、先生や看護師さんたちも何と声をかけたらいいのかというような表情で見つめていらしたのを覚えている。

その事があって以降だと思うが、私は、いい意味で、治療について「少し肩の力を抜く」ことができるようになっていった。あまり大きく期待をし過ぎない、たとえダメでも「せっかく諏訪まで来てるんだから温泉でも入って帰ろう」とか、何か楽しみをみつけて、自分を落ち込ませ過ぎないように、気持ちをコントロールしようと心がけた。夫との会話でも「最近強くなったね」と言われ、「打たれ強くなったかな」などと応えて笑えるような、そんな雰囲気になっていった。

そして、おそらくその辺りから、漠然と治療を“卒業”するとすれば、どんな形なのだろうというようなことを考えるようになっていったのだと思う。治療の卒業なら、すなわち妊娠・出産であって欲しいし、その期待感はもちろんまだまだ大いに持っていたが、反面「でもやっぱりダメなのだとしたら、どうやってやめるのかな？」とも考え始めていた。そして、先生にも聞いてみた事がある。「いつまで治療は続けられるものなのか。どうなったらやめるべきなのか」と。いただいた答えは「排卵があるうちは続けられる」というものだった。それはそうだ。それならばまだ当分続けられそうだと嬉しい反面、では排卵が

なくなるまで卒業しないのか、どこかで意を決してやめるということはあるのかなのか、それは何をきっかけにやめる気持ち固めるのか、誰が決めるのでもない、自分自身の決心なのだろうけれど、そんな決心は自分にできるのかどうか……など。“治療”そのものへの思いと平行して、“治療の卒業”に向けての迷いや悩みが次第に強まっていった。

そんな中、私が模索し始めたのが「里親になる」ことだった。治療を卒業して夫婦2人の暮らしをエンジョイする、もちろんそれも大事な選択肢だが、それよりも、血縁は無くとも“子ども”とともに歩む人生というのはどうだろう、そんな風に思い始めていた。里親に関して全く知識が無かったので、ネットなどでいろいろ調べてみた。そして、重要な点に気がついた。それは「年齢」だった。

「里親」と一言で言うが、実際のところ近年は「特別養子縁組」をするケースが多い。従来の「里親」は、生みの親に代わって子どもを家庭で育てる役割をする人のことで、親ではない。子どもは生みの親の姓のままだし、里親とは法律上の関係はない。（とはいえ、大事な“家族”であることは間違いないが…。）対して「特別養子縁組」をするというのは、裁判所の厳格な審判を経て、子どもと生みの親との法律上の関係は無くなり、養親のみが子どもの親になることで、実の親子となんら変わりない関係になるというものだ。

「里親」になることに、年齢的な規制はあまりないが、「特別養子」とするには、親と子の年齢差が“40歳”くらいまでが望ましい、というような表現をみつけ、私はおやっと気になった。中には、特別養子を望む人は40歳までと、年齢制限を設けた紹介機関もある。理由としては、子育てに費やす体力とか、教育のための経済力とか、そういったことがあるようだが、それにしても40歳ならもうすぐやってくる、さてどうしよう…。治療の卒業をまだ決心できてはいなかったが、一方で、里親→養子縁組という方法も、私の気持ちの中では次第に現実味を帯びていった。

ただ、夫の気持ちは、私とはかなり違った。“血のつながらない”子どもを育てるといのは、とても責任の重いことで、自信が持てないというのが当初の反応だった。子育ては多分とても大変なもので、その大変さを乗り越えていくには「自分の血を分けた子だから」という事実が無い限り、根を上げたくならないのではないか、というのが夫のとらえ方だった。私が「子どもなんて皆かわいい」と言ってみても、そんな簡単なことではないと、とても慎重に考えていた。それもそうだろうと思う。不妊治療の原因になっていたのは私なのであって、夫に問題は無かったのだから、なかなか“自分の子”を諦めきれない気持ちは強かっただろう。また、男性ならではの責任感の強さも、より慎重な発言につながっていたのかもしれない。その辺りの2人の話し合いは、しばらく平行線をたどっていた。しかし、年齢のことが気になっていたのも事実だったので、迷いを残しながらも、私達は「里親登録」をした。

里親に登録したところで、すぐに子どもとのご縁があるわけではない。なにより、まだ制度のこともしっかり把握し切れていないし、気持ちの整理ができていないわけでもない。そこで、私達は、いくつかの勉強会や研修などに参加した。実際に里親となっている方の話を聞いたり、児童福祉の専門家の話を聞いたり、本を読んだり。そんな中で、ある時、夫の気持ちが、変

わった。当初は、「生みの親から子どもを引き離してしまうことになる」という抵抗感を持っていたのだが、研修などを通じて知ったのは、「世の中には、どうしても一緒に暮していかれない親子があるのだ」ということ。そして、里親や養親は、そういうやむを得ない事情の生みの親に代わって、子どもを大切に育てていくものなのだという。夫の中で、すっと胸に落ちたことがあったのだろう。そこから先は、具体的に子どもとのご縁に少しでも近づくため、どうしたらいいのかを、2人で考え行動した。そして、おそらくこの辺りで、私達は、まだわずかな希望を持って続けていた治療を「卒業」した。

その後、ありがたいことに、私達には子どもとのご縁話があって、今は子育ての真っ最中だ。子どもを迎えてから、生活は一変し、自由な時間はほとんどなくなった。毎日が本当に慌しく忙しい。でも、これはおそらく、子育て中の家庭ではどこでも同じような光景だろう。何より、子どもの事はかわいくて仕方がない。それは夫も同様で、お風呂に入れたり、保育園に迎えに行ったり、とてもまめまめしく面倒をみている。先日、夫の友人が遊びに来た際、一杯やりながら一言、しみじみと、「親ばかりでこういうものかっというのがわかったよ」と語っていた。その言葉を聞いて、私は胸が熱くなった…。

長く治療を続けて、結局、私は子どもを“生む”ことはできなかったけれど、子どもを“育てる”ことはできるようになった。子どもを生めなかった事には、後悔も未練もない。「この子がなにより大事」と思えるからだ。だが、治療が無意味なものだったということでは、決してない。あんなにたくさん悩んで、涙して、夫ともとことん話し合っ、だから今があるのだと、つくづく思うからだ。くじけそうになっても、なんとか自分を励まして、次の目標に向かって努力する、そんな力を、不妊治療を通して身につけることができたのかもしれない。それでも、一人ではなかなか越えられない時には、たとえば相談室でお茶を飲ませてもらったり、ちょっと弱音をはかせてもらったり、そんな風に支えられてなんとか乗り越えさせてもらったのだと思う。いろいろと辛いことがあったからこそ、今ある幸せに「ありがたい」という感謝の気持ちを忘れてはいけないと、強く感じている。

子どもはまだ小さく、かわいいかわいいで今はいいが、今後は“血のつながり”のことで、大きく壁にぶつかる時がきっと来るだろう。ことに思春期には、間違いなく悩まされる事になると思う。そんな姿に、私達も心を揺さぶられたりすることもあるかもしれない。しかし、それを今から恐れていても仕方が無い。悩み苦しむ子どもに、私達もできるだけ寄り添い、支えてあげるしかないのだと思う、親として…。

(特別養子の年齢について、実際には40歳以上の年齢差の親子は数多くいます。)

〈Yさん〉

どんな些細なことでも人は選択しながら毎日を過ごして歳を重ねていく。〈子供〉を諦めるのではなく、目先を変えて《子供ではない何か》を選択し前に進もうと思う。



「お子さんはどうしますか？」婦人科検診で聞かれたのが治療の始まりだった。大きな筋腫が見つかり、地元の医師は手術を勧めるつもりだったのだろう。30才台最後の年。子供が要らないわけではない、欲しい時期に夫婦の気持ちのタイミングが合わず、いざ欲しくても出来ないまま過ごしてきた。『病院に行ってもま…』とも思っていた。でも、『もうリミットが近づいている』と思ったら、“一通りの検査で異常が無ければ(可能性があるなら)やってみよう”と遅いスタートラインに立った。“病院に行けば簡単に出来るんじゃないか”と高をくくる反面、“実母が41才で亡くなっているし(病気が原因だが)この歳から治療を始めるのはかなりのチャレンジャーだよ”とやや諦めの気持ちと両方だった。諏訪マタを紹介されてからの治療、やはり簡単には妊娠しない。年齢のせいもあるのだが、普通だっってそう簡単に妊娠はしないのだ。『子供は授かりもの』と痛感した。いくつもの過程を経て、命が宿る。どのひとつがかけても命が生まれることは無い。

検査の結果、決定的な不妊原因はないようだが、結局体外受精まで治療は進んでしまった。主人は「やるだけやってみよう。でも、回数は重ねない。出来ないなら、それでもいいよ。」と。はじめは一度きりと決めたものの結果は、“着床しかけた”状態だった。人間って欲が出る。「もう一度だけね」と主人に言われ二度目に挑戦。わずかながら妊娠反応あり。まんざら諦めたもんじゃないな…と思うのもつかの間、一週間後には数値が下がり卵の成長がストップ。先生を目の前にして涙がこぼれた。これには自分でも驚いた。ダメだった、と主人に伝えた時も大泣き。心のどこかで諦めていても、本当は子供が欲しいんだ、と思い知らされてしまった感じで、それがショックだった。確かに治療を始めてから、他人の赤ちゃんを直視できない自分が居た。なんて心が狭い奴なんだ、と自分が嫌にもなった。「もういい」と言っていた主人も「最後の一回ね」が変わった。二度目で反応がなければ止めていたと思う。でも三回目は反応なし。そして最後のつもりが嬉しいことに「胚盤胞1個」が凍結できた。最後に凍結卵が出来るなんて…。胚盤胞は妊娠率も高いようだ。もう期待している自分が居る。

治療の辛いのは何回治療を受けたら必ず出来ると約束されたものではないこと、費用対効果ではないこと。そして一番辛いのは、自分ではどうにもならないこと。説明会で吉川先生が話されていたことを思い出す。移植の度に、プリプリとした神秘的な卵に心の中で話しかける。判定までの間もまだどうなるか分からないお腹の中の卵に話しかける。それくらいしか出来ないから。でも結果は神様にしか分からない。治療を経験した友人も「ご縁」だからと言っていた。“不妊治療=子供が出来る”ではなく、“出来やすくする”なのだ。回数を重ねるうちには妊娠できるかもしれない。でも数回補助してもらって出来ないなら、自然なことと受け入れてもいいかな、と思える。このことをこの三回の体外受精で納得できてからは、最後の移植で子供が授からなくても私のこの先には「子育てより楽しい事が待つて

るよ・・・」と思えるようになった。同じ年代で頑張っている方を見ると、自分ももっと頑張らなくてはいけないのではないか・・・と自分を責めることもあるけれど、自分は自分でありたい。欲張りな私だから、体も心も治療だけになってしまう自分がなんだかもったいなく思ってしまうのだ。『子供が居るから楽しいこと』『子供が居ないから楽しいこと』この両方があるはず。養子を育てることだって選択できる。要は自分次第。

最近、髪を切った。二年以上伸ばしていたが、ここ数ヶ月悩んでバツサリ。長い方が良かったかな・・・とも思うが、それなりに楽しんでみるつもり。髪を切ることと不妊治療と一緒にするなど、お叱りを受けそうだが私にとっては大小の違いこそあれ、『選択して行くこと』においては同じ。みんなどんな些細なことでも選択しながら毎日を過ごして歳を重ねていく。<子供>を諦めるのではなく、目先を変えて《子供ではない何か》を選択する。悩んでも仕方がない。頑張る治療を続けるにしろ、やめるにしろ、前に進まなくては・・・。そして私の場合は、止めることで前に進もうと思っている。

この原稿が読まれる頃には、凍結胚盤胞の移植～判定が終わっているかもしれない。うまく行くことをもちろん心から願っているが、もし・・・もしダメでも大丈夫。先に進める心の準備は整いつつある。大丈夫だよ。治療をしてみても分かった心の痛み、これから先、人に優しくなれるんじゃないかな。治療を経験して何か得たものもあるはず。子どもが居ても居なくても、楽しく過ごせるかどうかは自分次第。～これが私の選択～

相談室の  
スタッフが



皆さんの質問に  
お答えします

相談室での相談やメール相談の中から多いものを載せていくコーナーです。



Q: 子宮内膜ポリープと言われましたが詳しく説明して下さい

A: 子宮内膜ポリープは子宮内膜の基底層に局所的にホルモンの感受性の高い部分が発生し、この部分に対するホルモン刺激に基づく過形成が原因で子宮の内腔に飛び出す形で出来るものです。この疾患は癌とは異なります。この病気があると正常の子宮内膜でないために着床する事が出来ず妊娠が成り立ちません。妊娠を希望されない方は必要ありませんが、妊娠を希望される方は検査が必要となります。その検査が子宮鏡検査です。肉眼的に子宮の中を観察することで正確に診断し、診断が正しければ子宮鏡下でポリープを切除します。日帰りで行ける検査ですが静脈麻酔をかけて行っていますので一日かかります。

## 9月～11月このとり外来の成績

妊娠	55人	採卵	395人
(IUIを含む)		胚移植	355人
		妊娠	122人

## 編集 後記

小平

今シーズンの冬は温かいと言われていますがそれでもやっぱり冬は寒いですね。ということで? 先日電気毛布を買いました。最近のものは優れもので、全面、半面切り替え可能。しかも遠赤外線でもほかほか。毎朝布団から出るのが大変です。

中島

調子が悪かった私の車もついに去年末に買い換えました。前の車は後部席の扉が一枚しかなかったので両方開くだけでも満足。今の車は装備が整っていてシートの下はヒーターでほかほか。鍵を入れなくてもエンジンがかかりすぎ〜!と感動。暖かくなったから遠出したいなあと春が待ち遠しいです。

小林

去年の暮れからテレビでマグロの一本釣り特集が放映されていました。新春ドラマのマグロもちろん二夜連続で見ましたよ。マグロ漁・・・いつか出てみたいと転職を夢見る今日この頃です。そのために買うものは、舟とソナーと電気ショッカー、あとモリ。これ全部新品購入だとかなりお高いと思うので、どなたかお持ちの方御連絡下さい〔笑〕

保科

家で熱帯魚を飼うことになりました。お店に行くと大小色とりどりの魚たち、体が透けて骨が見える魚、水槽にへばりついて苔を食べている魚、体がピンポン玉みたいに丸いものなど色々な種類がいてみていて全く飽きません。今回はネオンテトラという青い蛍光灯色の小さい魚を飼うことにしました。スイスイと元気に泳いでいます。

渡辺

今年の初日の出はなんと露天風呂で拝みました。湯桶に沈んだままだと壁が邪魔でよく見えないので、沈んだり上がったり、携帯片手にどの方向からのショットがいいものかと真っ裸でうろうろすること45分。寒さの中待った甲斐あって、最高の気分で初日を観ることが出来ました。あまりの綺麗さに興奮して、室内の湯船に居た人達に「出た出た出た」とガラス戸を叩いてお知らせ、もちろん真っ裸。今年もやります!何を!?ってね。

## 〈Tさん〉

職場への迷惑は避けることができないので、普段自分にできることは何なのか考えて、「皆に支えてもらっているお蔭」で治療を受けられることを忘れずいたい

相談室の前を通るたび「寄りたいな」「話したいな」と思いながらも、いつも夕方ギリギリに受付に飛び込んだり、朝1番で診察を済ませ慌てて職場へ向かったり、なかなか扉をノックすることができませんでした。

判定日、採血した後の30分間は胸がドキドキして緊張感が一気に高まり「今回こそは・・・でもまたダメだったら・・・」と複雑な思いが廻ります。そして順番が来て先生から結果をお聞きし、現実を受け止めるという一連は、何度経験しても決して慣れるものではありません。

11月のある日、今日こそは結果がどうであっても相談室へ寄って話を聞いてもらいたい！と思っていました。判定結果は「マイナス」ああ、今回もダメだったか・・・。吉川先生やスタッフの方々にあれ程力を貸していただいているのに、この瞬間本当に「ごめんなさい」という気分になります。カルテを相談室のポストに入れ、イスにかけた途端に涙が溢れました。そして私は「今日は一番イヤな日なんです」と詰まっていた思いを吐き出し始めました。

「〇歳と〇歳と〇歳で子どもを産んで、それは結婚したら当たり前のこと。なのに私達にとってこんなにも難しいことになるなんて」と・・・。

結婚4年目(20代)で初めて妊娠したものの、11週で稽留流産。その後なかなか妊娠せず、排卵誘発剤を飲んだり人工授精を繰り返し、判定がプラスと出ても1~2週間後には出血。不妊に関する本も手当たり次第に購入し情報ばかりを求めていました。何か原因や対策があるのならと病院を転々としたこともありました。体外受精を受けるようになってからは県外へ足を伸ばしたこともありました。もう何度受けたことでしょうか。途中から数えることをやめたので、正確な数は分かりません。“40歳”そこを治療の区切りにしよう、それまでにできなかつたらあきらめようと突き進んでいた30代。その40代も間近に迫り、治療の最後とする病院はやはり吉川先生にしよう、と6年ぶりに諏訪マタニティークリニックの門をくぐったのが今から3年前です。

仕事と治療の両立、これも私の中では外すに外せない大きな課題でした。体外受精を受けたい周期には、毎日の注射と数日に1度の受診。胚移植後も腹痛で何日か休みを取ったり、職場を空けると必ず誰かにその分の負担をおってもらうことになります。治療を受けたいと思っても仕事とのタイミングが合わず、吉川先生から次のOKサインをいただいても年に2~3回しかチャレンジできなかつたり。これならばいっそ仕事をやめたほうがいいのかと思悩んだこともありました。そんな時、主人や上司、仲の良い同僚は決まって「やめないほうがいい、その瞬間は辛いと思うことがあっても、それはほんの一時なんだから」とみな同じように励ましてくれて今までなんとか続けてくることができました。

今回も注射を始めて数日してから今周期の治療継続は難しいかな、と思う仕事上の問題が起き、そのことを上司に伝える行くと「このことと治療のことは別、治療を続けなさい」と言ってもらい、最後まで予定通りに行くことができました。

判定後「ご配慮頂いたのに良い結果が出ず申し訳ありません」と伝えた時も、「今一番辛いのはあなたでしょう。申し訳ないだなんて・・・体が回復したら次はいつチャレンジできそう？(仕事の予定表を見ながら)このころはどうか？」と、こんな温かい言葉をかけてもらいました。私は本当になんて恵まれた環境に置かれてもらっているんだろう、この日は何度も何度も涙を流しました。

このように職場への迷惑は避けることができないので、普段自分にできることは何なのかをしっかりと考えていくようにして、感謝の気持ちを忘れないこと、支えていただいているたくさんの方がいて下さるおかげで、治療を受けることができることを忘れずにいたいとあらためて思いました。

私は子供に携わる仕事をしています。とにかく子どもたちはかわいいです。笑い顔、くやしそうな顔、今にもこぼれ落ちそうな涙を必死に我慢している顔、反対に思い切り泣いている顔、毎日いろいろな顔を見せてくれる子どもたちがとにかくかわいいのです。1時間半くらいかけて職場に戻り、その道中ではベソをかいていても、玄関に入る前には気持ちを職場モードに切り替えます。するとそんな私を知ってか知らずか、ひざに乗って私の顔をいじったり、絵本を持ってきて読んでくれたり。弱く、しおれかけた私の心に柔らかな陽をあててくれる天使たち。

一つの区切りと思っていた40歳を越えました。40歳までと思っていたけど、越えても30代のころと違いは何も変わりませんでした。でも、いつかはピリオドを打たなくては、そういう思いも出てきています。それがいつかは正直分らないし、どうその時を迎えるのかも分かりません。治療することはもう自分のステータスの一部になってきてしまったので、それがなくなるのはどんなものを想像するのは正直怖い気もするのです。

その時、を考える心の枠を少しずつ大きくしつつ一番力になって支え続けてくれた主人と、今後の人生設計を考えていきたいと思います。

私がこのように自分を振り返り、自分の気持ちを整理できたのは、あの日相談室で時間を気にせず思うままに話し、まだ話し足りなかったことをメールした、そんな私のすべて受け止め、温かいお言葉をかけて下さった相談室のおかげです。ありがとうございました。

